

---

# 東方黒蛇録

白と黒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方黒蛇録

### 【Nコード】

N3767BA

### 【作者名】

白と黒

### 【あらすじ】

あっちへスルスルこっちへスルスル。

この身体で好奇心のままに、のらりくらりと動き回る。

自分の気持ちに正直な、奇妙で愉快で偶にはホロリ、そんな話ですが是非とも見ていてくださいな。

## 「話…のらりくらりと始まる」(前書き)

どうも、白と黒です。

これは東方凶鳥記とはまったく関係ない話になっていると思いますので、それを承知した上でお読み下さい。

## 一話：のらりくらりと始まる

回りからはよく変な子供とされていた。

自分と同年の子供が遊んでいても、それに混ざらずに飛び回っている羽虫を追い掛け回したり、子供なのに親の仕事の手伝いをしたり、普通の子供とは違う事をして過ごしてる。

言ってしまうと、自分は人一倍好奇心が強かった。

誰もがやらないような事をやりたがり、誰もが知りたがらないような事を知りたがり、そして誰よりも面白いものには目がない。

でも、改めて思うと自分はやっぱり見た目どおり子供だったんだなあと思ってしまう。

力だつてその辺の子供と変わらないし、頭だつて少しいくらい。でもやっぱり周りから見たら変わった子供。

今日も今日とて遊びに誘われたと言うのに、それを断って湖の近くで見つけた蛙をしゃがみながら静かに見つめている。

「蛙、蛙。アンタに名前はあるのかね？」

蛙はそれ聞いているのか聞いていないのか、ゲコーと大きく鳴くとまた何もしないでその場に留まる。

偶に指で突付いてみるけど、鬱陶しそうに鳴いたり手で払いのけたりするだけで、やっぱりそこから動かない。

そろそろ行った方がいいかな？ そう思つて立ち上がる。

「じゃあね、蛙。また会おうね」

こちらを見上げている蛙にそう言つて、最後に小さく手を振る。

蛙はそれを見ると、今まで殆ど動かなかったのに、脚で地面を蹴って湖の中に飛び込んだ。

蛙でも言葉がわかるんだね。始めて知ったよ。湖に飛び込んだ蛙を見送って、後ろを向いて歩を進める。

今日もあの人はいるのかな？

それは傍から見ればとても立派な神社だろう。

大きな鳥居はあまりの大きさと高さに見上げていると首が痛くなり、本殿は鳥居に負けず劣らずで普通に暮らす分には大き過ぎだ。

その本殿の入り口で、一人の少女がつまらなそうな顔をしながら縁に座っている。

金髪の髪で両端を赤い紐で縛っており、頭にはギョロリと真ん丸い目玉のついた帽子。

青い服に、真つ白で少々垂れ下がっている袖。下にはこれまた服と同じで青い、ミニスカートのような物を穿いている。

また、着ている服にも穿いている物にも、どちらにも二足歩行の蛙が描かれている。

「あ、いた」

俯きながらつまらなそうに足をプラプラさせていた少女は、声が聞こえた途端にバツを顔を上げた。

そこにいたのは小さな少年。

年は10にも満たないほどで、黒くそれなりの長さの髪を縛って一つに纏めている。

服は、膝より少し下まである和服の着ていて、草鞋を履いている。

その少年が笑顔で少女に小さく手を振っている。

少女は嬉しそうな顔をしながら手招きする。すると少年も笑顔のまま少女の目の前まで近づく。

「こんにちは、洩矢さま！」

「はいはい、よく来たね。座ったら？」

少女、もとい洩矢はそう言いながら自分の横をポンポンと叩く。

少年は少し躊躇ったが、言われるがままに洩矢の横に静かに腰を下ろす。

「それにしても暇だよねえ。態々こんな場所に来るなんてさ」

「前にも言いました。面白いものがある場所なら自分の足で見に来ます」

「ふう〜ん……でもせめて口調くらい子供っぽくしたら？」

「……あのですね、神様の前じゃしたくても出来ないんですよ」

忙しなく動いている少女の足は、まるで尻尾を振っている犬のようにわかりやすく、実に楽しそうだ。

少年は溜息を漏らしながらも、その顔は洩矢と同じでとても楽しそうに見える。

「別に、私が神だからって、そんな事気にする必要はないんじゃない？

私としても、そっちの方が気楽だしね。そもそも、供物もなしにただ神に会いに来てるだけでも不味いんじゃないの？」

「……それもそうだね。やっぱり俺にはこっちの方がいいや」  
「そうそう、いつも通りいつも通り」

そう言い、二人は笑う。それはそれは楽しそうに……

『……ん……ふぁ……よく寝た』

寝すぎたのかな、頭が痛い。

どれくらい寝てたかなあと思いつつ辺りを見わたす。  
少なくとも先程は夕暮れで、今は辺りがとても暗くなっているの  
でそこそこ長い間眠っていたんだと思う。

『嫌な夢………』

今は昔、何て言っても、この身体になってからまだ6年ほどしか経  
っていない。

前までは恋しかった故郷も、今はこの身体で生き残る方法しか考え  
てないから別に見に行きたいだなんて思っていない。

それに、帰ったところで居場所もないし、寧ろ命を狙われるのが当  
然じゃないかな。

弱い俺じゃ幾ら頑張っても蛙や鼠程度にしか勝てないだろうし、ま  
だ馴染んでる訳じゃない。

『……そう言えば腹減ったなあ』

そう呟きながら、首を動かして餌になりそうな生き物を探す。やっぱり少し不便かな、この身体。

見たところ餌になりそうな生き物もないので、諦めて今度は自分の身体を動かして餌を探しに行く。

今朝は変な木の実だったから、夜は肉を食べたい。何の障害もなく、自分の身体がまるで滑るように草の上を進む。

『お』

そして見つけた鼠。アレくらいなら俺でも狩れるかな。

なるべく気づかれないうちに身を低く、そして音を発てないようにしながら草の上を進む。もう少し、もう少し……

「 シャア！」

鼠との距離が充分近づくと同時に、口を開けて鼠に飛びつく。

行き成りの敵に驚いた鼠は逃げようとしたが、既に俺が胴体に食らいついてもう逃げる事は出来ない。

さらに、生えている鋭い歯のうち、他のより少し伸びている二つの牙で鼠の身体を貫く。

ピクリと動かなくなつた鼠から口を離し、少しずつ齧って食していく。骨くらいなら大丈夫、そのまま飲み込めるから。

さて、もうわかったかな。俺の正体は

『ん』。やっぱり丸ごと呑み込むのは無理かね』

蛇だ

それもただの蛇ではなく、小さな、それこそその辺に落ちている木の枝と同じくらいの長さで細さの黒い蛇。



目は赤く、夜の狩りでは下手をすると獲物に逃げられてしまうが、瞑ってしまえば気づかれずに獲物に近づいて捕らえる事が出来る。身体が黒いから夜に紛れやすいのかね。

『んぐ……うん、いつ食べても不味い』

個人的には少なくとも茹でるか、もしくは焼くかしたいけどこの身体じゃ出来ない。

贅沢は言ってられないから悲しいよ。

最初の方は酷かった。

お腹が減ってもどうしたらいいかわからなかったし、始めて捕まえた蛙も戻してしまった。

しばらくは木の実だけで我慢していたけど、やっぱり元人間としては獣肉とか魚は食べたい。

命を奪うのは躊躇うが、最近じゃそこまで気にしなくなってきた。だって食わなきゃ死ぬから。

俺だってまだ死にたくはない。

今までだって、この身体になってからは生きるためなら大抵の事はやった。

綺麗な水がなければ泥水を啜ったし、ちゃんとした食べ物がいなかったら腐った動物の死骸だって口にすることもある。

そこまでやったのは、全部が全部生きるため。

要はつまり、死ぬのが怖かった。

死んだらどこに行くのかもわからないし、何よりも死んだら面白いものが見れなくなるかもしれないし。

面白いものが好きな自分としてはそれは困る。

さて、そんな事を考えている間に、鼠はすっかり胃に収まって腹も膨れた。

見ると朝日も昇っており、辺りを薄く照らしている。

うん、もうそろそろ行こうかな。

朝日を見ながら目を細め、今度の目的地をどこにしようか考える。

『……………いつものらりくらり、ってね』

遠くを見てそう呟き、少し膨らんで動きづらくなった身体を引きずって進む。

今日はどこに行けるかな。

さてさて今から始まるは、この小さな蛇の、小さな、それでいてくだらない物語。

それでもよろしければ、皆さんお手を拝借致します……

## 一話…のらりくらりと始まる（後書き）

今回は、始めだったので短めです。

おそらく、何人かの方は前の小説を更新してくれと思っているでしょう。

けれども我慢してください。キツパリ忘れろ、何てことは言いませ

ん。  
これを読む時は、あの小説とはまた違う話なんだなあと理解してください、お願いします。

二話：残酷だっていいじゃない、生き残るためだもの（前書き）

長らくお待たせしました。

しかも今回も大して長くないです。

二話：残酷だっていいじゃない、生き残るためだもの

『  
』

身体を引きずりながら上機嫌で森の中を歩き回る俺。  
その口には一匹の小魚が。

実は先程、偶々湖を見つけてので喉を潤わそうと湖に首を突っ込んだら、この小魚が口に入ってきた。

俺は泳ぐのがそこまで上手くないので魚を見つけても大抵は逃げられてしまう。

捕らえた魚は小さな魚だが、俺の身体も小さいので充分腹は膨れる。

『この身体になってから食べる量が減ったなあ』

地面にボトリと小魚を落としてそんなことを呟く。

この身体、よっぽど無理をさせなければ無駄な体力を使わなくても済むが、ずっと動いたりしていると大して経っていないのに腹が減る。

それに身を守る時も大変だ。

身体が小さい、つまり、威嚇をしても大して相手を怖がらす事が出来ない。

普通に考えてみれば、こんな紐のような細さの蛇を怖がる生き物なんてそんなにいないだろう。

まあそれでもここまで生き残ったのは、身体が小さくて見つかりづらかったと言つのもある。

小魚の腹にかぶりつき、歯で千切りながらもそもそと齧る。

そこいらにいる蛇のように、獲物を丸ごと呑み込む事は出来ない訳

じゃない。

ただ、やっぱり元人間だったので食べ物や囓む癖は変わらない。

『……………うん？』

ふと、茂みから葉の擦りあう音が聞こえたので振り向く。

しかし、振り向くと音は止んでしまった。

はて、と思いながら先程まで揺れていた茂みが気になって好奇心で近づく。

近づいて茂みにあったものを見て俺は、見ないでそのまま立ち去って置けばよかったと後悔した。

「んごがぁ……………」

そこにいたのは赤い獣。

勿論、ただの獣ではなく妖獣……………つまりは妖怪。

妖怪とは何か？ それは簡単に言うと、人間の感情や想いや願いを具現化したもの、と言うのがわかりやすいかもしれない。

それは恐怖だったり悲しみだったり、他には嫉妬や絶望、はてには欲望まで何でもあり。

ただまあ、こんな嫌な感情ばかりではなく、喜びや憧れなどと言ったものもある。

大半は嫉妬とかいう感じの、負の感情なんだけどね。

うん、まあそんな事はどうでもいい。目の前の妖怪だよ。

俺が幾ら頑張っても、この妖怪には絶対に勝てない。

そこにある小魚を賭けてもいいくらい胸を張って言える。

この小さな身体で、一体どうやって戦えと？ 別に特別な力もないし、戦うための武器も持っていない。

だから勝てない。

まだ寝てるみたいだからこのままどこか適当な場所に逃げてしまおう。

そう思い、妖怪に背を向けその場を後にしようとする。

「んがぁ？」

背を向け小魚を口に銜えたと同時に、俺じゃない他の誰かの声が聞こえた。

額から冷汗が出……ないが、心では額どころか身体全体から冷汗が流れ出ている。

見たくない。が、そう思えば思うほど好奇心が湧き、自分の首はぎこちない動きで後ろを振り向く。

「グルルルルウ……！」

見たと同時に素早くその場から離れるように逃げる。

後ろから唸り声と、犬が吠えている鳴き声のようなものが聞こえるがそんな事は気にしてられない。  
逃げながら首を回して後ろを見る。

「ガウガウガウー！」

妖怪が吠えつつ、涎をたらしながら俺を追いかけてきている。

間違いない、やはり俺を食う気だ。

改めてあれの目的を理解し、さらに逃げる速さを上げる。

絶対に逃げ切って生き延びるからな！

『お前しつこい!』

いくら経っても妖怪は振り切れず、そして口には未だに小魚を銜えたままだ。

最初捕ったときは瑞々みずみずしかつたと言うのに、逃げ回っていて風が当たったせいで、今はもうその瑞々しさも失くなった。

それでも離さない根性、自分でも見上げたものだなあと思ってる。魚、あんまり食べる事出来ないからな。

「バウ、バウバウ!」

追いかけてくる犬が先程からずっとあんな感じで、やかましい事この上ない。

しかし、立ち止まった瞬間おそらくあの妖怪は俺を容赦なく食い干切ってしまうだろう。

『……ん?』

妖怪に吠えられながら逃げ回っていると、ふと獣道のようなものを見つけた。

しめた! もしかしたら……

ちよつとした期待を胸に抱き、獣道に抜ける。

『……見つけた』



そう呟きながら、身代わり<sup>みしろ</sup>に向かつて大きく飛び跳ねる。  
身代わり、要は妖怪の興味の持ちそうなもの、または獲物になるもの。

そして、俺の目に映っている身代わりは人間の男。

意地汚い笑みを浮かべながら、何か重いものが擦り合うような音がする血のついた布袋を持っている。

明らかにとんでもない事をしでかしてきたのは明白だ。

飛び跳ねた勢いで男の肩に飛び乗る。

さらに、肩に飛び乗った俺は手始めに近くにあった木の枝に向かつて大きく跳ねると、そのまま木の枝に噛り付いてぶら下がる。

これでいいかな。

「ウオオオオオン……！」

「な、なんだ!？」

辺りに低い唸り声が響き、男が慌てて自分の周りを見わたす。

だけど、もう遅い。

妖怪は後ろから男に襲い掛かり、男の肩に噛み付いた。

すると何の抵抗をする間もなく顔面から地面に衝突し、手に持っていた布袋も落ちる。

そもそも、どうして俺が態々男の肩に飛び乗ったのか。

理由は実に簡単、俺のにおいを男に残すため。

ああ言った知性の低い獣の妖怪は、獲物を見つけたときは鼻で臭いを嗅ぎ分けている。

そして知性がない故に、大抵のは獲物を見つけると同じ臭いの獲物を追いかけてしまう。

つまり何が言いたいかというと、あの妖怪を巻くためにあの身代わりに俺の臭いをつけ、あれを俺だと思い込ませた。

馬鹿だからあれくらいで簡単にだまされるよ、たぶんね。

と言つか、木に登れるなら最初から木に登ってやり過ごせばいいと思っっているだろう。

無理だ。頭は悪くても、力は普通の妖怪と何ら変わりはない。簡単に張り倒されてしまう。

「グルルルルウ……」

「ひ、やめ、助けて……！」

「ガアアアア……！」

男の命乞いも空しく、妖怪は男の首に食らいついて容赦なく貪っていく。

首を、肩を、腕を。男の身体の至るところが妖怪に食い千切られる。痛みで悲鳴を上げる事も、動く事も許されない。

気絶も出来ない、まだ死ぬ事も出来ない。それは例えるなら一種の拷問。

『うっん……気持ち悪い。』

身体を木の枝に巻きつけながらそんな事を呟く。

もう少しかかるね、どうせなら最後まで見ておこうかな。

木の上から見えるのは、中途半端に食い散らかされている男。

あの後、また別の妖怪が血の臭いを嗅ぎつけて集まり、男の身体を食うために争っていた。

で、まあ最初の奴は途中で満足して帰り、他の奴らも何匹かは不満そうだったが帰って行った。

周りに敵がいなくなつたのを確認して、身体を木に巻きつけながら地面に降りる。

『うへえ……近くだときついなあ……』

むせ返りそうになるほど血の臭いが充満している。とと、そうだった。

男の持っていた布袋に何が入っている気になり、布袋が落ちている場所まで行く。

布袋まで近づき、結ばれていた紐を口で解いて中身を確認する。

『……まあ、予想通りかね』

中に入っていた物を見て思わず溜息が出る。

わかると思うが、中に入っていたのは金だよ、金。

普通なら喜ぶんだろうけど、俺にとっては使い道の欠片もない。

念のために首を突っ込んで他に何か入っていないか確認してみたけど、入っているのは金銭くらいで他には何もない。

こんなものを持って行っても仕方がないので、そのまま放って置いて辺りを見渡す。

妖怪はもういない。

屍は放って置いても別に構わない。

魚は木の上にいる時に全部平らげだし、男自身ももう何か持っているようには見えない。

これ以上ここにいても何もなさそうだし、そろそろ行ってもいいか

ね。

『じゃ、運が悪かったとも思って成仏してくださいな』

最後に後ろの屍に向かってそう言い、身体を引きずるように獣道を歩く。

さてさて、せいぜい誰にも会わないことを願おうかな。……その前に、何か食べるもの探さないと。

二話：残酷だっていいじゃない、生き残るためだもの（後書き）

そんな訳で終わり。

次回は少し物語を進めようと思っています。

いい加減、主人公の名前も出したいですから。

三話：俺は妖怪？（前書き）

タイトルは適当につけました。  
そして今回は……

### 三話：俺は妖怪？

木の枝に巻きつきながら日向ぼっこを楽しむ。

さわさわと吹く風が、葉っぱと俺の頬を撫でて通り過ぎていく。

さてさて、この姿になってから既に50年近くの年月が過ぎてしまった。

うん、言いたい事はわかる。

俺の記憶じゃ確か蛇はこんなに長生きはしない。

長く生きても大体20年位かなと思ってたけど、案外長生きするんだね、蛇って。

『……そんな訳ないよねえ』

いや、薄々変だなあとは思ってたんだよ俺も。

だって、偶に妖怪がすごい親しそうに近づいて来たりしていたし。

今まではそれを見ても畏かなあとか、人違いだろうなあとか思ってたけど、もうわかった。

たぶん俺は

『妖怪、かね……』

それしかない。

元々、ただの蛇じゃないってことは何となくわかっていた。

と言うかこんな全身真っ黒で赤い目って事自体がもう既におかしい。

まあね、『神』じゃないだけまだいい方だと思っけどね、俺は。

もし俺の予想が外れて妖怪じゃなくて神だって言われたら、俺はこの舌を噛み千切って死んでやる。

絶対に死んでやる。

『……それは兎も角、何で今まで気づかなかったんだろうなあ……』

ものの見事に自分が妖怪だと気づかなかった。

ん……そう言えば、妖怪と言うのは妖力があるらしい。

たぶん、今まで自分の妖力の存在に気がつかなかったから、そのせいもあって自分が妖怪だと気がつかなかったんだろう。

ではどうするか？ 決まってる。今から実際に妖力を出してみればいい！

と言うわけで……

『ホアアアアア！！』

とりあえず、気合で出せるかなと思い叫んでみた。無理だった。

ひゅーんと吹く風が豪く寒いと感じてしまったのは気のせいではないだろう。

まあ幾ら大声を出しても、姿を見られたりしていない限り俺の存在は気づかれないから問題ない。

さびしい事だが、俺の声はその辺の人間や妖怪には聞こえないらしい。

以前、人間を見つけて話しかけてみたのだが明らかに俺が何を言っているのかわかっていない様子だった。

他の人間にも試してみたが同じ対応をされてしまい、その時は本当に自分の言葉が通じていないのかと疑っていた。

まあ他にも何人かに話しかけてみてやっと自覚できたけどね。大体40人以上話しかけて、うち10人ほどに殺されかけた。

『……何か虚しい』



声が聞こえないとは言え、やはり叫んでも何の反応もないとなると変な気持ちが入り込んでくる。

馬鹿馬鹿しいと思いつつも木の上から飛び降りて華麗に着地する。べちゃっと身体を勢いよく地面に叩きつけてしまい、思わず先程食べた鼠が解けた状態で吐き出す所だった。

『……せめて妖力を持ってるかどうかだけでも知りたいかね』

2、3度咳き込んでからそう呟き、するすると身体を這わせて山道を進む。

何か面白いものでも見つかるといいなあ。

『……何だろうね、これ』

目の前にあるのはおかしな空間。いや、何て言うんだろう……うん、変な空間。

ぽよんぽよんと跳ねながら山道を満喫していたら、木の裏から変な感じがしたので見てみた。

そしたら、何かを無理やりこじ開けてその両端に布を結び付けたような空間が開いていた。

ここでも発揮される俺のどうしようもない好奇心。

だがこのおかしな空間の中に何が入っているのか、そしてどこに通じているのかが気になってしょうがない。

元々好奇心だけははずば抜けていた。まあそんな訳で。

『お邪魔しまげふあ！？』

勢いよく飛び跳ねて空間の中に入ろうとしたら、何か壁のようなものにぶつかり何かが身体を奔る。

わかつていると思うが、けっして好きでこんな奇声を放ったんじゃない。

『む……』

入れないのか？　と思いながら尾の辺りを伸ばして入れようと試してみる。

伸ばして入れようとした瞬間、再び見えない壁に遮られ弾ける何かが身体を奔った。

『……何で入れてくれないのかね』

今度は尾でばしばしと見えない壁を叩いてみる。うん、痛い。

『入れてよ』

文句。おかしな空間を遮っている壁に向かってひたすら文句を言いながら尻尾を叩きつける。

叩きつける度に弾けるような何か身体を奔り、正直言って痛い、つらい、めげそう。

でもここでやめたら男として駄目な気がするので、何度も尻尾を叩きつけて見えない壁を壊そうと頑張ってみる。

『意地でも壊してやつからな』

気の抜けた声だなあと、くだらない事を考えながら、また尻尾を振り下ろした

「はあ……はあ……」

山の中を、木を掻い潜りながら走る。  
枝のせいで頬に傷がついたり衣服が破けていたりしているが、今の私はそんな事は気にしていられない。

「待てやこの餓鬼やあ！　ぶっ殺してやる！！」

後ろから何匹もの妖怪が、私のことを叫びながら追いかけてくる。  
何匹かは倒したのだが、残っている妖怪たちの数はざっと20以上もいる。

追いかけている理由も殆どが私のせいなのだが、幾らなんでも多すぎだと思う。

「あつ……！！」

妖怪から逃げるのに必死で足元の木の根に気づかず、足を引っかけて躓きその場で前のめりに倒れる。

急いで立ち上がろうとするが、どうやら転んだせいで足首を挫いてしまったらしく上手く立ち上がれない。

「へ、へへへ……もう逃げられねえぞ？」

いつの間にか私を取り囲むように妖怪が集まってきている。  
生憎、妖力はもう逃げるのと数を削るのに使い切ってしまった。  
かと言って腕力で戦おうにも、この数じゃ突っ込んだ途端にお陀仏  
確定間違いなし。

「……まだ方法なら……」

「何を一人で言っただけやがる？」

一匹の妖怪が怪訝そうな目で私を見る。  
それを気に留めず、『能力』を使用するために何とか妖力を掻き集  
めてみる。

……よし、少しだけ集まったわね……

「ふふふ……じゃあ、そろそろお暇させてもらうわ」

そう言いながら、手を少し横に動かして能力でひび割れた空間を開  
く。

妖怪たちは焦りを見せ私を捕まえようとしたが、それよりも早く空  
間に潜り……こまなかつた。

いや、潜ろうとしたが潜れなかつたと言っただけが正しいだろう。

何故かと言っただけ……

「シャー」

蛇だ。

何故かは知らないが、蛇が私の作った空間から顔を出して辺りを見  
渡しているのだ。

蛇は何事だとしても言わんばかりに私の作った空間から飛び出てくる

と、私と周りに居る妖怪たちを交互に見渡す。  
それに対し、私も妖怪も啞然とするばかりだ。

蛇の身体を全身黒く、瞳の色だけが黒ではなく赤く鈍い色を放っている。

「……は!？」

蛇に氣をとられていたら、いつの間にか能力で作った空間が消えていた。

しまった! もう妖力がないからあれは作れない……

「……は、ははは……ははははははっ!!」

おい見るよこいつ! 自信満々に何をするのかと思えば、ちっこい蛇出ただけだぜ!？」

一匹の妖怪が笑い出し、それに釣られて他の妖怪も声を上げて大笑いをする。

それが酷く癪に障る。

何故だか、横にいる蛇にも笑われている気がしてならないので見てみたが、別にこれと言った反応をしていなかった。

そりゃそうよね……

『グイ』

若干落ち込んでいると、蛇が私の服の袖辺りに咬みついて引っぱり始める。

何事かと思い蛇を見ると、尾である一点を指し示していた。

そこは妖怪も障害物もない空いている唯一の逃げ道。

再び蛇に目を向けると、蛇は私を見て小さな舌を出し入れしながら

こくりと頷いている。

未だに笑っている妖怪たちの隙を窺い、思い切り立ち上がると同時に掛ける。

立ち上がった瞬間蛇が頭に飛び乗ったが、寧ろ手間が省けたと言う事で気にせず妖怪たちの輪から抜け出す。

「あ、また逃げたぞ！ 捕まえろ！！」

『うーん、多いねえ』

少女の頭から落ちないように乗りながら、後ろに居る妖怪を見て呟く。

頭に乗ったのは初めてだが、中々にいい乗り心地だ。

『あ、そこ左に曲がって』

頭の上から少女の目の前に尾を垂らし、先っちょを左に曲げて道を示す。

少女はそれに従い俺の指し示したとおりの方向へと曲がって走る。

ん、ところでどうして俺がこうなったのか気になるだろう。

あの後、何度も見えない壁の破壊を試してみたのだが結局壊れず、最後に頭から突撃して二の舞のなつてやろうと思ひ実行した。

そうしたら意外にもあつさりとおの妙な空間び中に入る事ができた。まあ中に入ったのはいいが、実は入ってきた時の入り口が閉じてしまい帰れなくなってしまった。

少し彷徨い続けた結果、いきなり自分の目の前に同じような出口が出来たので顔を出して確認してみたら見知らぬ少女と一緒に妖怪に囲まれていた訳で……

それで少女が目の前に居たので、もしかしたらこの妙な空間に入りたいのかと思って出たのはいいが、今度はその空間が閉じてしまった訳で……

少女が落ち込んでしまったのはどう見ても俺のせいだと思ったので、とりあえず謝罪の意味も込めて逃げる手伝いくらいはした方がいいなと思った。

『次も左』

尾を垂らして左に曲げる。

ちなみに言っておくと、俺はこの道なんてまったく知らない。

寧ろここはどこだと聞きたい。

では少女の道案内をするのは無謀ではないだろうか？

ふ、50年間あらゆる外敵から逃げ続けたこの俺の力を舐めないで貰いたい。

確かに道はわからないが、その代わりに俺は50年間でどこか安全な道かを見極める鋭い勘と洞察力を手に入れた。

勘が危険だと訴えてくれれば進まずに、比較的安全な道でも最近妖怪などの危険な生き物が取っていないかなどを見極めている。

「はあ……はあ……つ、次は！？」

『ん、このまま真っ直ぐ』

尾を前に突き出す。

少女は俺に言われたとおりに真っ直ぐ前へと走る。

だいぶ疲れているようだが、俺は戦えないのでもし少女がここで倒れたら、あの追いかけて来る妖怪たちに黙って差し出すしかない。外道？ 外道の何が悪いのか俺にはわからないなあは。

『ん？』

やけに静かになったなあと思い後ろを見ると、先程まで少女を追いつけ回していた妖怪たちが見当たらなくなっていた。

たぶんもう大丈夫かなという事で、少女の額を尾の先で軽く突付く。少女は俺の言いたい事が通じたのかその場で立ち止まり、後ろを見てどっと座り込んだ。

『お疲れ様』

話している事はわかっていないと思うが、一応そう言って少女の頭から飛び降りる。

改めてみると、少女の服装は意外と変わっている。

ここじゃまず見られない長い金色の髪で、髪には所々に赤い髪留めの布が結わえられている。

頭の上にはおかしな被り物をしていて、服は……何て言ったらいいんだろう。

上と下が繋がっていて、下の部分には穴が開いている……うん、洩矢神の着ていた服を大きくして奇麗にした変わっている紫色の服、とでも言っておくしかない。

「それにしても……」

少女はそう言いながら俺のことをじっと見つめてきた。



やだ、恥ずかしい。そんなに見つめないで／／  
……馬鹿な事を考えるのはよそう。

「今気づいたけど貴方、妖怪だったのね」

「……へ？」

え、俺やつぱり妖怪だったの？

普通の蛇じゃなかったの？

訳がわからず、思わず首を傾げてしまう。

「あら、自分でもわかってないのかしら？

貴方は私が言ったとおり妖怪なのよ？ それもそこそこの妖力を持  
った……ね」

ほんの少し悔しそうな笑みを浮かべながらそんな事を言い出す少女。  
俺ってそんなに妖力を持つてるの？ まあ50年生きてるから、そ  
の辺にいる妖怪よりは大きいんだろっね。

もしかして目の前にいる少女も妖怪なんだろうか？

だったら、さっきの悔しそうな顔は俺の大きさ妖力で負けたからか  
ね？

わーい勝ったー。

「……何だか豪く嬉しそうじゃない」

いや、はっきり言ってそこまで嬉しくはない。

持つてると知ったところで、俺はこの力、つまり妖力の使い方をま  
ったく知らない。

どうせなら教えてくれんかねお嬢ちゃん。

「まあいいわ。とりあえず、助けてくれてありがとう」

少女はそう言いながら俺の頭を人差し指で撫でる。  
頭を撫でられるのは始めてだが、そこまで悪くない。くすぐりたいけど。

「それじゃあ……もうそろそろお暇させてもらっわ」  
『うん？ もう行くんだ』

声は聞こえていないが、少女は俺の言った事がわかったらしく小さく頷いて俺の頭から手を退かす。  
少女は立ち上がると手を横に引き、あのおかしな空間を作り出した。この子か、作ってたの。  
切り開いたようなおかしな空間の中に潜り込む。

「あ、言い忘れてた。一応恩人だから名乗っておいた方がいいわよね。私は」

何かを言おうと、少女が空間から顔だけを出す。

「やくも 八雲 ゆかり 紫よ。機会があつたらまた会いましょう？」

最後にそう言うと、少女は頭を引っ込めて空間を閉じてしまった。  
あゝ……

『妖力の扱い方、聞いておけばよかった……』

「ふう……」

自分の作り出した空間の中で怪我の手当てをする。

と言っても、少し切れている服を着替えたり血を水で濡らした布で拭き取っているだけだが。

それにしても疲れた。

まさか気紛れで投げた三つの石が、縄張り争いをしている妖怪たちの指導者に当たるとは思わなかった。

しかも争っている両方の妖怪たちの指導者の頭に、だ。

もう一つは近くにいた何の変哲もないただの妖怪に当たっていた。

まあその後色々あつて、妖怪たちが怒つてしまい戦っていたが妖力が殆ど尽きて逃げていた、と。

「……そう言えばあの黒い蛇の名前、聞いてなかったわね……」

私は名乗ったのに。

あの黒い蛇、少なくとも、今の私の妖力よりは大きかった。

つまりそれだけ長く生きているか、もしくは元から妖力が大きかったか。

まあ私はまだ若い方なので、たぶんあの黒い蛇が私よりも長く生きていたんだろう。

「また会えたらいいわね……」



三話：俺は妖怪？（後書き）

はい終わり。

今回は皆大好きまだ若き八雲紫さんです、はい。

だいたい30才くらい？ もっとあるかな。

まあまだ若いって事で納得してください。

そして今更ですが、この作品はどこかで『あれ、おかしくね』という話

があるかもしれません。

そういう時は感想で聞いてください、出来る限りお答えします。

あとあと出てくる時代設定もおかしいところがあると思いますが、そこは……まあスルーで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3767ba/>

---

東方黒蛇録

2012年1月14日18時51分発行